ひびのこと vol. 4

アトリエ Fuu
OIDEYOハウス
風の工房

ひびのこと：尾崎仁一
風の工房：宮下宜績
アトリエ Fuu：野口一枝
OIDEYO ハウス：青木稔

いばしょをつくる

彼女には夢がある。山内さんが初めて風の工房に来た時、とても緊張していて小さな声と事前に書いてきてくれたメモで会話をした。その時つくった作品が「もちプーの家」だ。段ボールとテープとボンド。彼女の相棒であるクマのぬいぐるみ（通称もちプー）の家。「これどうくっつけたらいいかな。色どうしたらいいかな」一緒につくることで、少しコミュニケーションをとることができた気がした。

現在、風の工房では本原カフェ（つくる時間を楽しむコミュニティスペース）を主宰している雨海武・順子氏に講師として週2回のペースできてもらっている。この日、彼女は多めの水で溶かした絵の具を画用紙に垂らし、その絵の具をストローで吹いたり、紙を傾けて絵の具を流していく技法（ドリッピング）を教えてもらい、一緒に絵を描いた。翌日「今日も絵を描く」、と言って絵の具の準備をしていた。他の人の作品や制作からアイディアを発展させていく力や集中力が高く、脳がフル回転してる彼女のエネルギーは凄まじい熱量を放っている。「オレンジ色だからみかんだね」「ミドリ色はスイカだね。赤色は実でタネは黒だからね」「ここ、カオだよ。みかんの精とスイカの精なんだよ。」絵を描く過程で、どんどんと物語が広がっていく。

彼女の活動ブースには、作品たちがたくさん置かれている。卓上の織り機でつくった織りや、ボタンにビーズをつけたアクセサリー、手作りのポンポンを使った絵画、段ボールでつくった造形作品など、色々なものを創ってきた。その活動ブースは彼女が安心出来る「秘密基地」であり居場所なのだと思う。彼女の夢は、「この活動ブース丸ごとギャラリーに展示する」こと。彼女の「居場所」が様々な場所に広がっていく。

（風の工房・アトリエ Fuu・OIDEYO ハウス　佐田　芽衣）

作品：宮下宜續「風の工房」

瞬間【しゅんかん】

辞書で意味を引くと「ごくわずかな時間」と出てくる。対義語は「永遠」「悠久（ゆうきゅう）」など、時間が果てしなく続く様が表記されている。さらに英語に言い換えると「Ｍｏｍｅｎｔ」日本語の「瞬間」と似たような意味の他に「現在」「この地点」「節目」という表記もあった。

日々の（利用者の）皆さんとのやりとりは、言葉・表情・行動などを通して、私の色々な種類の感情を呼び起こしてくれる。ちょっとした笑いを生みたくて放った私の一言に、鋭いツッコミで笑いを倍増させるＹさん（その視点があったか！と驚く）。気を使わせてごめんね、と相談いただいた内容に対する私からの言葉に、面談の最後に私に気を使って一言添えるＭさん（気を使わせている自分を反省）。新たな作業や活動などを提案した時、言葉では気持ちの表明が苦手なので目や表情から気持ちをくみ取りたいが、うまくくみ取れない事があるＹさん（自分の感度の低さに自己嫌悪）。

今の時代、効率とか成果に価値があり無駄を省くことが正しい、という空気だ。でも、そこを求めて行きつく先は人間らしさの喪失、つまり心の喪失ではないか。成果があろうが無かろうが、意味があろうが無かろうが、じかに会ってやりとりすれば、疲れる事も時々あるけど、心が潤っていく。

支援者という立場の私たちは、皆さんの思いを知りその実現のために仕事をさせてもらっている。日々のやりとりこそ、その具体的な手段だ。100％の実現はきっとできないけれど、ちょっとした事でも望みが叶う日々を積み重ねてもらいたい。そして、その積み重ねは私たち支援者にとって「最高の喜び」という感情を呼び起こしてくれる。

（共同生活サポートセンター　久保雅信）

この仕事をさせていただいていると「寄り添う」という言葉をよく耳にします。「寄り添う」ことって、とても大事なことだと思いますし、それなしでは支援なんて絶対にできません。ただ、同時に「寄り添う」ってとても便利な言葉だと思うときもあります。寄り添っているつもりが、過剰な関わりになって、ご本人のできることを奪ってしまったり、ご本人の想いとは裏腹に支援者の都合を押し付けてしまっていたり。「寄り添う」ということが何かをいつも考えさせられます。

日々、利用されている皆さんの支援をしている中で、伝える言葉や手法をあれこれ考えながら、ああじゃないこうじゃないとご本人と相談しながら過ごしていると時々、同じ波に同じタイミングで乗れたような、富士山のてっぺんに太陽が重なり、ちょうどダイヤモンド富士になったような。そんなお互いの呼吸がバチッと重なる瞬間に出会うことがあります（たぶん、日々支援をしている方たちはこの感覚がなんとなく分かるはず・・・）。

おそらく、その瞬間は間違いなく「寄り添う」ことができている瞬間で、そんな瞬間を日々の中でたくさん作っていくことが、利用されている皆さんの自信や輝きになっていくのだと思います。そして、その瞬間を味わえるということが私たち支援者としての醍醐味であり特権であり、支援をしていくうえでの明日への糧になっているのではないでしょうか。

（OIDEYO ハウス　本多将之）

普段の生活の中で「あっ！」「ふっ！」と思うようなことって在るようで無いようで、無いようで在るような・・・。でも、それはどこにでも存在しているのだけれど、なかなか気づけない。果てしなく長く続く時間の流れの中で、ほんのごくわずかな時間をとらえることは容易（ようい）ではない。当然、獲物（えもの）のように狙ってとらえる物でもない。その瞬間に出会えたならラッキーなこと。旅の途で「いいものみっけ！」といった感じ。そうでなかったら「残念。また今度！」くらいがちょうど良いと思う。

アトリエ Fuu に集まってくる利用者さん達は、瞬間（感動）を探している集まりだ。アトリエ Fuu のアート活動は日中連携プロジェクトの枠の中で復活してまだ、土台作りの段階。この先はどうなるかはわからない。

よく「センスが無い」なんて言う人がいるけど、そんなことは無い。みんな「センス」の塊（かたまり）。元々、持っている。それはまだ、自身に合った表現方法に出会っていないだけで、必ず何か自身にぴったりの表現方法があるはずだ。その表現方法に出会う瞬間を楽しみに活動を続けていれば、大きな力が生まれてくるに違いない。アトリエ Fuu は、そんなワクワクさせてくれる場所でありたいと思う。

（アトリエ Fuu　菊地剛）

「日中事業所連携会議」って何やってるの？と疑問に思っている方は多いのではないでしょうか。昨年度、アトリエ Fuu から OIDEYO ハウスに異動になり、新しい環境での仕事が始まった。数ヶ月が経ち、寒くなってきた頃、アトリエ Fuu で活動しているよし子さんが作った毛糸のペットボトルホルダーを愛用している利用者さんを OIDEYO ハウスで見かけて、とても嬉しい気持ちになった。私がアトリエ Fuu にいた頃、活動時間・休憩時間関係なく、自分のペースで黙々と毎日編み物をしている姿が印象的で、日に日に完成に近づく作品を眺め、時に配色を一緒に考え、販売会で商品が売れると共に喜ぶ、そんな日々が懐かしくなり、この光景をよし子さんにも見せたいなあ～そんな風に思った。

その頃、販売する機会が少なくなり、編み物の制作活動をしていないことを聞いた。そこで、12 月にあるアリオ上田での販売会に、一緒に参加してみないかお誘いすると、とても意欲的に制作されたそう。一生懸命作った商品は初日に全て完売した。普段はちょっとツンデレなよし子さんが、「わ～！嬉しい～！！」と売れていく商品を見て純粋に喜ぶ姿。よし子さんが「やりがい」を感じた瞬間、その「やりがい」に少しでも携われた私も「やりがい」を感じ、充実感を得たことを覚えています。

今回のこのエピソードは、このプロジェクトがあったからこそ出来たこと。「こんなことが出来たらいいのに！」を他の事業所で補い合ったり、「こんなことをしてみたい！」を他の事業所に手伝ってもらったり、そんな風に活動の幅を広げていきたいと考えています。

（OIDEYO ハウス　花岡由衣）

作品：宮嶋悟朗

この世に生を受けて４９年

風の工房　中村豪さんのものがたり

３才の時に高熱が出て小児科で診察をしてもらったのですが、症状はよくならず熱性けいれんを発症しました。今考えると小児科の先生も自分の手に負えなければ脳外科へ紹介をしてもらえれば、何か違った人生があったかもしれないと思うと親にしてみれば残念を通り越してこんなことがあってもいいのかという気持ちになってきます。

上田養護学校へ入学するようになりましたが、この頃の養護学校はまだ障がい者に対しての理解がないような気がしました。タケシにしてみれば毎日が苦痛のようでした。親にしてみれば養護のスタッフは障がい者のことをどれほど理解して障がい者と接しているのか疑問に思うことが多々ありました。養護学校を卒業してかりがね学園へ入所することができ、タケシにしてみれば養護学校とは違う毎日の生活で辛いこともあったと思いますが毎日をタケシなりきに一生懸命過ごしたのではないでしょうか。

その後、風の工房へ行き、タケシも最初は戸惑うことがあったと思いますが、スタッフの協力、そして接しかたのおかげで風の工房にも馴染んできたような気がします。風の工房ではキャッチボール、粘土、段ボールへのシール貼り等その他色々な活動をさせてもらっています。タケシにとっては毎日が楽しい時間だと思います。

コロナ禍で行動の範囲が限られているなかで今迄は毎月1回善光寺へ行き御参りをしてからお蕎麦屋さんへ行き蕎麦を食べるのを楽しみにしていました。蕎麦屋の店員さんとは最初にお店に行った時店員さんの接し方がタケシにとっては体に感じる何かがあったのかな、笑顔で下を向いていました。その後蕎麦を食べた店の暖簾をくぐると店内を見ていつもの店員さんがいると「いるいる」と言って楽しそうにお蕎麦を食べていました。風の工房もコロナ禍で休みになった時は毎日DVDを見たり、1時間位ドライブ、スーパーへの買い物で過ごしました。タケシにしてみれば、何で工房へ行けないのだろうと思っていたのではないでしょうか。

現在タケシの心配は腰、膝、足首の痛みです。病院でレントゲンをとっても異常がないと言うことで原因がわかりません。タケシも痛いといってくれればいいのですが、親にしてみれば毎日工房に行きスタッフそして利用者さん達と毎日を過ごすことが楽しくてしょうがないのではないでしょうか。これからも毎日工房へ行き楽しい人生を送ってもらえれば幸せです。

（父　中村　勝）

逸見さんのお習字「麻雀の役」

企画・編集・発行：日中事業所連携会議
発行日：2022 年 12 月 20 日

Instagram、はじめました。

OIDEYO ハウス：@ oideyohouse
風の工房：@ kazenokobo1989
アトリエ Fuu：@ atelier_fuu__